

授業改善と子供たちの様子
— たちばな学級 マット運動「マット名人になろう」の学習を終えて —

今回の授業づくりを通して目指した「子供の姿」

- 安全に気を付け、すすんで協力しながら運動に取り組むことができる。
- 自己の課題に合った場で、すすんで友達と動きの工夫を伝え合うことができる。
- 基本的な技の行い方を知り、技能を身に付ける。



研究協議会を経て改善したこと

- ◇他の子の動きをあまり見ていない子供が多いグループでは、「トン・クル・ピタ」の掛け声をグループのみんなで言うようにした。それ以外のグループでも、「トン・クル・ピタ」ができていないかを的をのぞいて見るようにし、友達の試技を見る際の焦点化を図った。
- ◇「トン・クル・ピタ」をアドバイスの語彙としても活用した。「『トン』ができていたよ。」等を、アドバイスの際の話型として提示した。
- ◇基本の技中心のグループでは、4種類の動物歩きの動きを全員で一通りさせてから、子供にどの動物歩きをしたいかを選択させるようにして、着手等の技能の定着や運動量の確保を図るようにした。



改善後の子供たちの姿

- ◎「トン・クル・ピタ」を前面に押し出し、掛け声を掛けたり、見る視点としての的をのぞいたりすることで、意識しながら試技を行うことができ、技能の定着を図ることができた。今まで友達の試技を漠然と見て「できてたんじゃない？」等と伝えていたのが、見る視点が定まったことで「『トン』ができていたよ。」と伝えるなど、アドバイスの質も向上した。
- ◎基本の技中心のグループでは、4種類の動物歩きの動きを全員で一通り行うことで、身に付けさせたい着手等のマット運動の素地を養うことができた。また、一人ずつ行う時間を短縮し、回転を早くして運動量を確保することができた。



授業者の振り返り <たちばな学級担任>

- 感覚運動遊びを積み重ねることによって一つ一つの動きの質が向上し、マット運動の技の習得につながった。マット運動のみならず、運動会の表現等、他の運動技能の向上にもつなげることができた。
- 一単位時間の流れをパターン化し、授業の後半にチャレンジタイムを据えたことで、習得した技能を自由に試すことができた。友達の技をまねてやってみた結果、技能が向上するなど、チャレンジタイムは異学年での学び合いの空間として効果的に働いていた。
- 「前転⇒後転⇒側方倒立回転」の順に技をつかんでいく単元構成にしたが、側方倒立回転は時間を設けた割にはできないことにつながらなかったため、子供たちの実態を踏まえて、前転と後転のみにしぼって技の向上を目指す単元構成でもよかったのではないかと感じた。